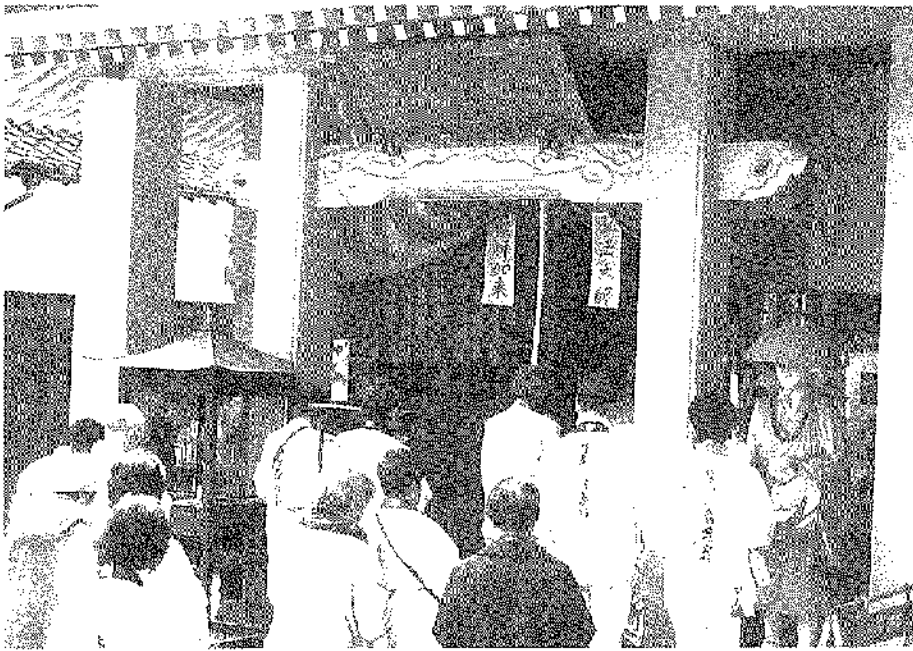


# シリーズ 阿久比を歩く①



弘法堂を参る団体の人たち

知多四国八十八カ所弘法参り

あぐいぶらり旅

知多路の春は知多四国弘法参りで始まる。

三月になってから、町内で弘法参りと思われるバスやタクシーを多く見かけるようになった。

町内には知多四国八十八カ所の札所の寺が五カ所ある。

春の訪れとともに、弘法寺巡りをして阿久比のまちを足で歩いてみた。

三月五日(土)くもり。

日ごろ運動不足がちな友人を誘い、役場を出発点に第十三番札所板山地区の安楽寺まで歩くことにした。

オアシス大橋を渡り、阿久比団地を横目に目的地に向かった。福生地区に入り、田んぼの土手に目をやると、「つくし」を発見。風が冷たく少し肌寒い日だったが、確実に春はそこまで来ていることを実感する。

目的地の安楽寺に到着。境内に一歩足を踏み入れると人影はなく、香の匂いが立ち込めている。中央にはいぶきの木がそびえ立ち、本堂、観音堂、弘法堂が整然と並び、いか

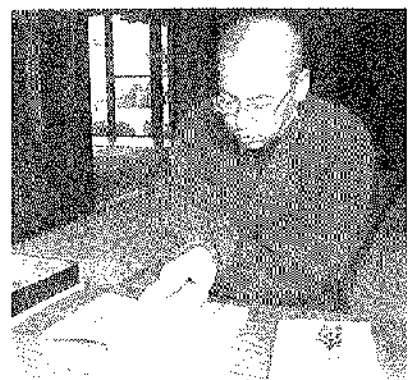
にも寺という雰囲気は漂っていた。せっかくのいい機会だと思い、「奉納経」を購入して朱印してもらおうことにした。

さい銭をあげて本堂に手を合わせた。本尊の無量寿如来座像を眺めることができた。少し目を開けたふつとくらしの顔立ちの仏像であった。

住職に許可を得て、建造物などを写真に撮らせてもらっているとき、車で名古屋の西区から来たという老夫婦に出会った。

「毎年この時期になると、弘法さん参りをするのですか」と尋ねると、「今年の一月から始めたんだよ。二年くらいかけてゆっくり夫婦で八十八カ所巡ろうと思っていたんだ」ときさくに答えてくれた。

そうこうしていると今度は、バスで訪れた二十人ほどの団体に出会った。毎年弘法参りをしているような感じの人たち。弘法堂の前で般若心経を団体で唱え始めたので、後ろから一緒に拝ませてもらった。



奉納経に朱印をする竹田住職

## 板嶺山 安楽寺

本尊は無量寿如来で曹洞宗に属する。

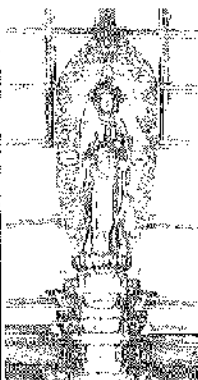
寺伝によると、文禄二年（一五九二）、洞雲院二世久山昌察大和尚を駒山として創建。

慶安元年（一六四八）字川向安楽寺元居士敷から現在地に移転。

慶安・享保に続き、又文化六年（一八〇九）に八世玉峯僧山和尚によって再建。

現在の本堂・庫裡は、昭和五十七年九月に再建。

## 聖観世音菩薩立像



9年ごとに開帳される秘仏

聖観音菩薩立像が安置されている観音堂

住職の話によると、行基菩薩の作と伝わり、普段は観音堂の中の厨子に納められて9年ごとに開帳される秘仏。

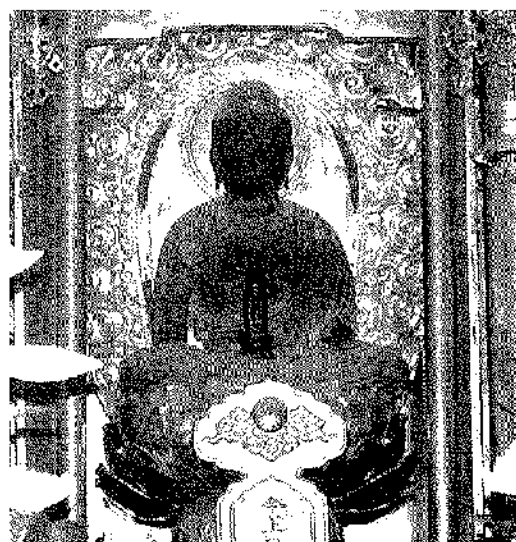
幼いころから足が不自由だった人がこの仏像に祈願をしたら全癒したとの話が伝わっている。

次の開帳は平成20年。

### 歴史解説

#### 行基

奈良時代の僧。（668～749）諸国を巡り、池堤設置・寺院建立・道路開拓・橋梁架設を行う。聖武天皇の依頼を受けて大仏造営にあたり、大僧正位を授けられる。



## 本尊 無量寿如来座像

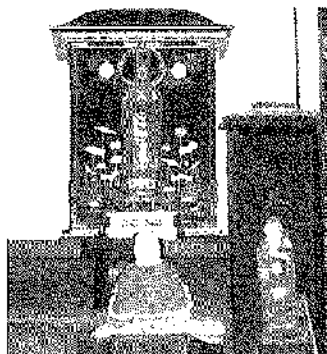
恵心僧都作。名古屋市の服部氏から寄進されたもので年月不詳。

### 歴史解説

恵心僧都（源信）

平安中期の天台宗の僧。（942～1017）「往生要集」を著して浄土教の基礎を築いた。

## 天白地蔵菩薩木像



木像が納められている厨子

普段は地蔵堂の中の厨子に納められている。

耳の不自由な人が、穴の空いた柄杓を供え祈願をすると耳が聞こえるようになったという話が伝わり、明治・大正時代には、三河地方や伊勢方面の地名のある柄杓もよく見られた。



福山川沿道

安楽寺を後にして次に第十四番札所福住地区の興昌寺に向かった。

福山川に沿って細い道を歩いた。

この日は、層のうえで「啓蟄」にあたる日だった。冬眠から覚めた虫たちが何かいるかと思ひ、下を見ながら足を進めた。

川ものぞいて見たが生き物らしきものはまだ発見できなかった。

今回から五回シリーズで阿久比の五つの札所を紹介します。

今回は興昌寺です。

（参考資料 阿久比町誌・阿久比の寺院 あぐいのあゆみ・広辞苑）

# シリーズ 阿久比を歩く②



境内西側にある弘法堂

あぐいぶらり旅  
知多四国八十八カ所弘法参り

第十四番札所の福住地区興昌寺に着いた。  
まず目についたのは、山門に向かって左側にある行者堂だ。  
ここには知多四国八十八カ所霊場を開いた、福住出身の岡戸半蔵がまつられている。身近なところにとりっぱな業績を残した人物がいたかと思うと、なんだかうれしい気持ちになった。  
山門をくぐって境内に入った。右手には立派なイチョウの木があつた。(樹齢一五〇年くらいになるそうだが、一五〇年であれだけ立派になるとは驚いた)  
納経所のある庫裡のチャイムを鳴らした。若い「おっ・さん」が出てきてくれた。「御納経」に朱印をしてもらい少し話を聞いた。  
「寺にまつわる何か面白い話はないですか」と尋ねると、「今日は住職が留守をしています。私は副住職です。ので詳しいことが知りたければ後日聞いてください」と前置きした後話を聞かせてくれた。

「この寺には、もともと福住地区の縣神社にあつた」かわずの面(能面)を預かり大事に箱に入れて保管してあるのですが、平成六年七月の大洪水の際、地区の人たちに昔から雨乞いに使われた面を開帳し、祈禱してもらいたいと住職に依頼があり、開帳して本堂に供え「大般若」をあげたんですよ。そうしたらその日の夕方、少し雨が降りましてね。それから不思議なことに、その日から住職が高熱を出して、三日間寝込んでしまいました。住職は「わしが犠牲になったのかなあ」と首をかしげて笑っていました」  
世の中には本当に科学では証明できない不思議なことがあるのだなあと感じた。



朱印を押す前田副住職

# 岡戸半蔵

四国所  
知多八十八力  
創始者



興昌寺に保管されている  
半蔵ゆかりの『馬のあぶみ』  
※鞍の両脇にさげ騎者の足をふみかける馬具



観音堂の天井に描かれた絵

**圓通山 興昌寺**  
本尊は釈迦如来で曹洞宗に属する。  
寺伝によると桶狭間の戦い（文禄三年（一五六〇）の五月十九日、織田信長が今川義元を奇襲して討ったとき、今川勢の部下岡戸祐宜左衛門が福住に住み、亨隱慶泉大和尚を迎えて開山したといわれている。



行者堂に置かれている岡戸半蔵行者立像

宝暦二年（一七五二）福住に生まれる。  
妻と子どもを亡くし途方に暮れ、

荒古の阿弥陀堂にこもる日が続いたが、亡くなった妻子の菩提をとむらうために、諸国巡礼の旅に出る。

文政二年（一八一九）に古見妙楽寺の亮山上人と出会い、知多四国霊場の開創を決意して、田畑を売り払

い資金を作る。

文政六年（一八二三）に四国の武田安兵衛が加わり、三人で札所勧誘のため霊場となる寺々へ向かう。

文政七年（一八二四）八十八力所の制定を完了して弘法大師像の開眼供養をする。この年、古布村（美浜町）誓海寺で亡くなる（七三歳）



本堂横の観音堂に入れてもらった。天井を見上げると格天井になっていて正方形に仕切られた枠の中には、人や動物などの絵が描かれていた。  
観音堂の正面中心には如意輪観音坐像が安置され、その脇には三十三観音菩薩像が並んでいた。三十三のそれぞれ違う顔をした観音菩薩は、どの顔もみな優しい顔立ちであった。弘法堂に手を合わせた後、境内を出ることにした。山門に立ち止まり振り返って一礼をして興昌寺を後にした。

次に第十五番札所坂部地区の洞雲院に向かった。

福山川沿いを西に向かって歩いた。川沿いの土手に、黄色い花を咲かせた「菜の花」がよく目に付いた。

英比小学校近くの英比音橋を通りかかったところで、耕運機を運転する人とすれちがった。そろそろ田を耕す季節。冬眠から目を覚ました力エルたちがこの辺りで「合唱」を始める日も近い。  
次回は洞雲院です。

# シリーズ

## 阿久比を歩く③



洞雲院山門

知多四国八十八カ所弘法参り

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

すでに二つの寺を巡った。時計を見ると一時半。足に疲れがきた。休息を取り腹ごしらえをすることにした。

坂部橋を渡り少し歩いて、県道沿いの飲食店で少し遅い昼食を食べた。一時間ほど休んだ後、県道を西に横断して南にほんのわずか下ったところに向「新四国十五番洞雲院」と記された石門があった。そこから細い道を通って本日のぶらり旅最後の目的地「洞雲院」に向かう。細道は車の通りもほとんどなくとても静かで、昔ながらの板張りで黒色をした外壁の古い家並みが目に付いた。

洞雲院に到着。徳川家康の生母・於大の方ゆかりの寺院、阿久比を紹介する際に必ず名前が出てくる寺だ。石の階段を上り、山門をくぐって境内に足を踏み入れる。私たち二人以外には誰もいない。午後三時近くになると、太陽の位置も西の方角に移動して陽の当たる場所も少なくなっていた。

於大の方が、戦国時代の女性の哀

しみが繰り返されないようにと、何度も足を運び祈願した場所。その同じ場所に立っているかと思うと感慨深げな気分である。

まずは「奉納経」に朱印を押してもらう。笑顔が素敵な「若お庫裡さん」が気さくに応じてくれた。

本堂にあげてもらい、町指定文化財などが置かれている奥まった部屋へ案内してもらった。

薄暗い部屋の正面中央にあるのは「廻地頭厨子」という説明を受ける。周りの位牌や仏像が年月の経過によって黒や灰色の暗い色をした中で、厨子は鮮やかな金箔が施されてひと際目立っていた。

境内の西側に於大の方遺髪墓がある。周りの雑木林の間から入り込む光線のせいか、墓が薄暗い空間の中でスポットライトに照らされているかのように、神秘的な印象を受ける場所だった。



奉納経



「於大の方」の遺髪が分納されている墓所  
(この地は、久松・松平家葬地として町指定文化財となっている。)

## 於大の方

徳川家康の生母「於大の方」は14歳の時、岡崎城主松平広忠に嫁ぎ翌年竹千代(後の家康)を産む。

その後、政略的に離別させられ、坂部城主久松俊勝に再嫁する。

家康が今川氏配下の武将として尾張に出陣の際、坂部城(現在城山公園、町立図書館の周辺)に立ち寄り母と子の再会を果たしたと伝えられている。

慶長5年(1600)関ヶ原の合戦で家康が勝利して天下の実権を握った2年後、慶長7年(1602)8月28日京都伏見城で没する。

遺髪が洞雲院の墓所に分納されている。



毎年3月16日に行われる「おせんぼ」で飾られる

## 町指定文化財 『涅槃図』

**龍溪山 久松寺洞雲院**  
洞雲院の本尊は如意輪観世音菩薩で曹洞宗に属する。  
寺伝によると、創建は天暦二年(九四八)で菅原道真の孫、雅規が開基とされる。  
創建当時は、久松寺といいた天台宗であったが、明応二年(一四九三)に、久松定益が禅透和尚を開山に迎え、久松寺を改め龍溪山久松寺洞雲院となり、曹洞宗の寺院として再建。  
久松家歴代の菩提寺で、家康の生母於大の方の墓や久松・松平家の墓地がある。



中央が廻地頭が収められている廻地頭厨子

## 廻地頭(廻地蔵)

阿久比町で中世から近代にかけて見られる民間信仰のひとつ。

中世にあぐいの地を治めていたといわれる英比丸の徳を敬い、その夫婦の木像を民家に一日ずつ安置して礼拝し、巡回する民間信仰。

現在では行われていないが、戦前までは母屋を新築すると、洞雲院から借り受けた廻地頭を安置して供養を行った。

貸し出した範囲は、阿久比町だけではなく、半田市の乙川や亀崎なども含まれていた。

洞雲院を後にして、今は城山公園となっている「坂部城」跡を横目に再び県道に出て出発点の役場に帰った。  
今日は無事三つの弘法寺を巡ることができた。車での生活に慣れて、歩くことが少なくなった今日このごろ。久しぶりにピクニックに出かけたような楽しいがらり旅だった(足は次の日に筋肉痛となる。)  
次回は平泉寺です。  
(参考資料 阿久比町誌・阿久比の寺院、あぐいのあゆみ)



石門



# シリーズ 阿久比を歩く④



写真左：弘法堂 右：本堂

## 知多四国八十八カ所弘法参り

あ  
ぐ  
い  
ぶ  
ら  
り  
旅

四月二日(土)くもり

前回は役場から北側に位置する弘法寺三カ所を巡った。今回は南側に位置する二カ所を前回同様、友人を誘ってぶらり旅に出かけた。

今年は桜前線の北上が少し遅いのか、出発地点の役場の桜は、つぼみがようやく膨らみかけている。来週には満開の花を咲かせてくれるだろうと期待をしながら、第十六番札所 棕岡地区の平泉寺に向かった。

県道を南下する。弘法さん参りの白い衣装を身に付けたグループを乗せたタクシーが横を通り過ぎて行く。

十分ほど歩くと「平泉寺」と書かれた大きな看板と寺の屋根根が、道路の東側に見えてきた。

目的地に到着。西側の入り口から境内に足を踏み入ると、読経の音が聞こえてきた。車が本堂の前に置かれ祈とうが行われていた。

本堂前に教育委員会が作った平泉寺を説明する札があったので、立ち止まり読み返した。



朱印を押す住職

源頼朝が野間の里に父義朝の墓参りの帰途にこの寺を訪れ、眺めた中秋の名月がとてもしずらしかったことから「月の明らかなるに過ぎる何も無くさえ渡れば、円月坊と称すべし」と命じ、坊内を円月坊というようになった。と記されている。その場所から空を眺めた。くもり空だった。

境内南の表門横に鐘楼がある。入母屋造りの立派な屋根の下には、大きな鐘がつり下げられ、地上から少し高くなっているこの場所から見る月もすばらしいのだろう。上つてみた。東前方には東部地区の町並みを一望することが出来る。なかなかの絶景だ。

いつものように奉納経に朱印を押してもらい、住職に寺を案内してもらった。

## 歴史解説

円 仁(慈覚大師)

天台宗山門派の祖。(794~864)最澄に師事。東密(空海を祖とする)に対抗する台密の基盤を整備、比叡山興隆の基礎を確立した。

源頼朝

鎌倉幕府初代将軍。武家政治の創始者。(1147~1199)

## 鳳凰山 平泉寺

平泉寺の本尊は不動明王で、天台宗に属する。  
淳和天皇が慈覚大師円仁に命じて、天長七年(八三〇)に開創したものと伝えられている。  
文治六年(一一九〇)源頼朝が野間の里(美浜町)に父義朝の墓参りの帰途、この寺を訪れ本尊尾張不動尊に国家安穩を祈願する。また、その時に中秋の名月を賞して坊号を大乘坊から円月坊と称するように命じたといわれている。  
文永十一年(一二七四)蒙古襲来の際、後宇多天皇の命により、本尊不動尊に異国降伏の祈願が行われる。

## 伝説

邪鬼がこの地方を荒らして、人々を苦しめていた。大変武勇に勝れた英比丸が、その邪鬼を退治して地中に深く埋め、再び出現しないようにと魔除けの柁を植えたと言われる。  
ある夜、邪鬼を埋めた柁の下で慈覚大師が野宿をしていた。角の生えた童子が土の中で苦しんでいる姿を夢で見た。翌朝、大師は柁を倒して、その柁で仏像を刻みまわったのが平泉寺の起りといえられている。

## 県指定文化財

### 不動明王立像

(昭和29年指定)

秘仏で一般には公開されていない。高さ一二五センチの中心一木造りで、藤原後期の作品と思われ慈覚大師の作と伝えられる。

阿久比町誌・阿久比の寺院から写真掲載



### 毘沙門天立像

(昭和29年指定)

高さ一一五センチ。不動明王立像よりやや後期の作品と思われ、運慶の作と伝えられる。



### 阿弥陀如来座像

(昭和40年指定)

高さ九九センチの寄木造りで、仁平三年(一一五三)という制作年代が書き込まれ、藤原後期の作品で県下の銘のある仏像のなかでは、最古のものとされる。



この寺には、県指定文化財の三体の仏像がある。

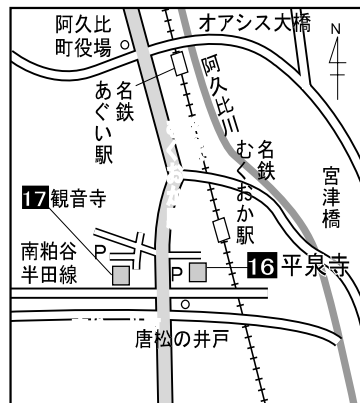
客殿には阿弥陀如来がずしりと座っている。廊下を渡り本堂に入れたら、黒光りをした毘沙門天立像が目飛び込んできた。こちらをにらんでいるようではあるが、よく顔をのぞきこむと立派な顔立ちである。

その横には本尊が安置されている厨子がある。本尊の不動明王立像は秘仏となつている。文化庁の調査の際、一度だけ開帳したことがありますが、本尊さんの顔はイメージと違い、不安感のない、柔和でやさしい顔でした」と住職が話してくれた。

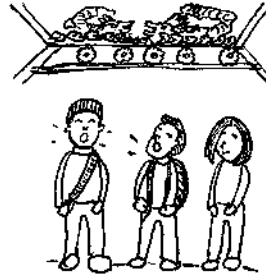
別れ際に「後世にこの貴重な仏像たちを残していかなければならない。地震や火事からいかに守っていくか、毎日頭を悩ませていますよ」と真剣な表情で語っていたのが印象的だった。

次回は観音寺です。

(参考資料 阿久比町誌・阿久比の寺院、あぐいのあゆみ、広辞苑)



# シリーズ 阿久比を歩く⑤



観音寺本堂

知多四国八十八カ所弘法参り

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

平泉寺の表門から下った所にある唐松の井戸（慈覚大師円仁の祈とうにより水が湧き出し、農民を日照りから助けたと伝えられる井戸）をのぞき、角前田の交差点を渡り、西に向かつて第十七番札所、高岡地区の観音寺を目指した。

県道は車の通りが多い。交通安全に気を付けながら歩を進めると、弘法寺を示すのぼりが見えた。矢印に沿って細道に入った。間もなく見上げるような石段が目前に現れた。

小高い丘の上に観音寺はある。石段を一段一段と登り始めた。半分くらいまで登った所で、ふと「何段あるのだろうか」と思い、もう一度下に戻って数えることにした。かなり険しい急な石段で、運動不足の私たちにはつらい。「はあー、はあー」息が切れた。七十四段あった。

登りきった場所から、後ろを振り返って見る。目の前に榎大地区の住宅や田園風景が広がる。

一礼して境内に足を踏み入れる。今まで巡った中では一番小さな寺に

感じられ、正面に本堂がひっそりと建っていた。幼い子どもが二人、堂の前で手を合わせて何か願い事をしている。とてもほほえましい光景が目についた。

あいにく住職は留守だったが奉納経に朱印を押してもらい、話を聞いた。この寺の住職は、知多四国で三人しかいない女性の内の一人だそうだ。せつかくの機会だったのに会えなかったのがとても残念。

寺の中を見せてもらった。欄間に金箔が施された立派な彫刻がある。今にも飛び出してきそうな、躍動感あふれる「竜」の彫り物。山車の彫刻で知られる「彫常」の作品だそうだが「山車の彫刻は一年に一度しか見えないが、ここに来てもらえば毎日見えますよ」と副住職。



朱印をする副住職



石段最上段から見える田園風景

## 檜木山 観音寺

観音寺の本尊は十一面観音菩薩で、浄土宗に属する。

創建は不詳で善随大和尚が開基とされる。

寺伝によると、観音寺は檜木田村にあったものを高岡村に移したといわれている。

文亀二年（一五〇二）の文書『英比谷虫供養縁起』に、古来念仏虫供養講番の二十二力村の順が定められている。その中に炊田村があり、檜木田村を炊田村ともいったことから、その時代には観音寺が創建されていたと考えられる。

寺に保管されている鰐口（仏堂正面の軒下につるす金属製の音響具）には、元禄二年（一六八九）に高岡村人から、この鰐口が奉納されたと記してあることから、元禄年間に現在地に移ったといわれている。

## 欄間彫刻

本堂の欄間は彫常作。

大正十三年から三年かけて彫らした作品。

彫常は明治・大正・昭和にかけて、膨大な量と質の高い彫刻を残している。知多地方全域にわたり、寺社や山車に多くの作品を残し、阿久比町の山車にも彫常の作品が残る。



## 本尊 十一面観音菩薩

50年に一度開帳される秘仏（前回開帳は平成11年）。

作者、制作年などは不詳。

普段は本堂正面の厨子の中に安置されている。（厨子の前は御前立ち）



## 鰐口

元禄2年（1689）の表記あり



本堂に手を合わせる子ども

「知多四国八十八カ所 弘法参り」のシリーズは今回で終了します。次回からは「阿久比ぶらり旅 自然を求めて」を連載します。

（参考資料 阿久比町誌、あぐいのあゆみ、広辞苑）

町内五つの弘法寺を春の訪れとともに、友人二人で歩いて巡ったぶらり旅。どの寺も取材に快く応じてくれた。貴重な文化財もたくさん自分の目で見る事ができた。今まで知らなかった「あぐい」も再発見できた。

本尊の十一面観音菩薩は五十年に一度しか開帳されない秘仏ということだ。平成十一年に開帳した際には「仏自体は真っ黒でした。目元が厳しく、目から光線を放っているような神秘的な顔でした」と副住職が感想を語ってくれた。次回開帳のときにはぜひ見てみたい。元氣ならば私は八十二歳になっていると思う。

